

Q 学校教育目標を設定するときに留意すべきことを教えてください。

A 4月1日、新しい勤務校に着任するなり、教頭から「早速ですが、明後日に最初の職員会議が予定されていますので、今年の教育目標をお話してください。」と言われました。

この学校の事を何もわかっていない私が、大切な教育目標を今決めるのは難しいと思いながら、「昨年度までの教育目標を継続したい」と、返事をしました。そして、2日後の会議では、昨年度の教育目標を私なりに解釈し、先生方に徹底をお願いしたのですが、どうもすっきりしませんでした。

それから3カ月後、「今年の教育目標は？」と教員に問うと、やはり、まともに答えられる者はいませんでした。数年前から同じ文面であるのに・・・・・・・・。

このように、どこの学校でも教育目標が設定され、様々な文書類にきちんと表記されていますが、その関心度や理解度となると、かなりお寒い現状があるように思うのです。

このたびの学習指導要領改訂の方向性を示した中央教育審議会の答申では、以下のように学校教育目標に対する“不断の見直し”を提言しています。

「学習指導要領等が、教育の根幹と時代の変化という『不易と流行』を踏まえて改善が図られるように、学校教育目標等についても、同様の視点から、学校や地域が作り上げてきた文化を受け継ぎつつ、子供たちや地域の変化を受け止めた不断の見直しや具体化が求められる」その意味で、高く掲げるにとどまる学校教育目標を、教職員はもとより、子供たち、さらには、保護者や地域の人々にとっても、“活きた目標”として身近な存在とすることが学校経営上の課題になります。改めて、日々の教育活動にとって、また、それぞれにとって、学校教育目標を身近な存在にしていくために、どのように見直しを図っていくかが問われています。

教育目標の決定は校長の専決事項ではあるのですが、それ故に決定までの過程では、学校・児童生徒・地域保護者の実態を踏まえ、教職員による協議が大切だと考えます。学校教育目標及び重点目標を学校評価にリンクさせ、学校評価をツールとしてPDCAサイクルを機能させて、学校として組織的・継続的な改善を図ることが大切です。

また、学校教育目標と校訓が別のものであるよりも、何らかの関係性をもたせる必要もあると思います。例えば、『不易』の部分を校訓に、そして、『流行』の部分を学校教育目標に託して、相互補完的に機能させていくという方法もあると考えます。

校種

全校種